

教務だより

2013年6月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

今こそ、WIN-WIN

茗溪塾塾長 宇野雅春

日曜日、しばらくぶりに勉強に来た S 君は、いかにもかったるそうです。宿題を全くこなせないで、親に厳しく言われて、仕方なく来たという感じです。宿題のチェックリストを見ると、クラスの中でも一人だけ宿題をほとんどやっていません。実際にとりかかってもすぐよそ見をしたり、ぼーっとしたりで勉強が進んでいるように見えません。

そこで、先生がついて個人指導。「数学の宿題」にとりかかりました。全く分かっていないわけではないのですが、間違っていて認識しているようなことが出てきても、「あーそうなのか！」という気付きをせず、先生が言ったようにさっさと直して、次を終わらせようとしています。繰り返し確認しようとする、本人は面倒だなという顔をしてそっぽを向く感じです。これでは先生が、宿題を手伝っているだけ。本人も宿題を終わらせるために先生を利用しているだけということになります。先生の方も時間をかけた分の成果が期待できない「無力感」を感じてしまいます。そこに、同じクラスの T 君がやってきました。宿題はそれなりにやるのですが、数学が苦手です。そのせいか数学の宿題はやっていなくて S 君と同じところをやり始めました。T 君も悪戦苦闘、同じような箇所ですでに躓いています。先生は2人を一緒に見る形になりました。やり残した宿題をさかのぼってどんどんやり終えていく…いつの間にか2人で競う形になってきました。そこからは S 君の集中力が、それまでとは全く違ってきたのです。予定していた時間を延長して宿題はかなりやり終えることができました。2人ともいままで、面倒、難しい、という印象で手をつけなかった所が、実はそれほどでもないということに気がついたようでした。つまり「理解」に要する時間を、ほとんど取っていなかったということなのです。新しい単元が出てくるたびに「わからない」「面倒」「自分には無理」という感じで、全く勉強していなかったということです。塾に来る生徒の中には、こうした理解を全て塾の先生がやってくれると考え自分では何もしないケースが多く見られます。「先生が教える」=「成績が上がる」という図式は、相当優秀な生徒には、当てはまるのですが、一般の生徒にはあてはまりません。課題に対する自分の「努力」の部分を塾は教えサポートしていく必要があります。そのための「補習」ということになるのです。

S 君や T 君の場合のように、一人でやるより集団が大きく全体を引き上げていくことの方がよいものです。5月の「優先順位」(スケジュール管理)に引き続いて6月は「WIN-WIN」です。「比較」や「競争」は2大悪習と言われていますが、自分が目標を設定し、それを達成することは「人を蹴落として自分が勝利する！」ということとは全く違います。

相互が努力し共にがんばることで、共に勝利するという「WIN-WIN」の考え方は「受験」にはぴったりです。結果が出た時、本当に努力をし続けた結果であれば、相手の成功も喜んであげられるはずですが、コミュニケーション能力の一つの難関ですが、生徒には受験を通じて、人の関わりを見つめ直し「WIN-WIN」の「習慣」を獲得してほしいと思っています。

仕事で痛感することは、どんなに優秀な人でも、自分のためだけに仕事をしている人は、どうしても「成功」に至らないということです。自分の成功だけ考えて動かれるのでは、周りは迷惑だし、自分の条件だけ整えられたりすると、上司や部下は辛い目に遭います。何よりも今の時代、努力の方向が一つでないことが多くのロスを生みます。自分がいかに優秀かとか、自分がいかに正しいかではなく、目標にどう近づいたのか…関わった人に対してはどうだったのか…自分たちは今どこから来てどこへ行こうとしているのか…関わる全ての人にとって有意義なことは何か…仕事であればそういう「考え」が不可欠です。

それを考えるいいチャンスが実は「受験」にはたくさんあるのです。

そして受験は、明らかに「WIN-WIN」です。厳しい受験こそ「合格」はその先にあります。